

## 2011年 12月23日・陸奥新報「文化」欄では

### 祈りの詩、感性語る論

#### 鶴田出身石村さん 詩集と詩論集刊行

鶴田町出身で千葉市在住の詩人石村柳三さんが第3詩集「合掌」と第2詩論集「時の耳と愛語の詩想」をコールサック社から刊行した。生活感あふれる祈りの詩、著者に寄り添いながら感性を語る詩論が展開する。

詩集「合掌」は5章で構成された詩79編と70首の短歌を載せた1章が並ぶ。「津軽りんごの花の詩」や「私心《津軽あいや節》」の故郷を詠った詩などを収めた1章「たんぼぼの微笑」から、表題作など仏の道への認識が発せられる2章「合掌」、仏教・人生体験から出た詩群の3章「眠れる人」、そして石村さんの詩想の集大成ともいえる4章「石の思想」とつながる。また5章は「初期詩編」として1968～81年の詩を掲載した。

短歌は72年から83年までに発表した作品で「岩木山ゆゆしく聳ゆ弘前で花そえたりし善蔵の墓」「破壊せし船の面影胸を憑き夕日沈みぬ十三の砂山」など、津軽で詠んだ歌も並んだ。

詩論集「時の耳と愛語の詩想」は2007年以降に書かれたものを中心に6章でまとめた。

表題作の1章は道元の「正法眼蔵」の中にある《愛語》の言葉について語るなど、慈しみ思いやる詩的言語が人間の内面の変革を促すと指摘する。2章「詩人と批評精神」では青森市の未津きみさんら19人の詩集からの詩人論などを展開。3章「定型詩人と作家たち」には五所川原市の俳人成田千空さんの句にみる風土性など、7人の文学精神を説き明かしている。

また4章「詩人と校正」ではエッセーや論考、詩論集や詩集を刊行した思いなどを収録した。5章「詩誌・詩集評」は長年書き継いできた詩誌評や詩集評を紹介。三つに分かれた6章は鳴海英吉研究会での講演や発言を再録した「①講演・座談会記録」のほか、「②千葉県の詩運動」「③短説と詩の解説」を載せた。

石村さんは「独り行く精神の見者のごとく、求道する言語人であってほしい。時流に逆らうこともうた、さけぶ詩人であって欲しい」と理想の詩人像を語っている。

と紹介されています。